

AP/FD NEWS Letter

2015年9月 Vol.4

質的な転換を、
大きな形に

YNU
横浜国立大学
YOKOHAMA National University
Initiative for

表紙：巻頭言

P 2：平成27年度授業設計と
成績評価ガイドラインの策定について

P 3：就業力の可視化①

P 4：【AP/FD用語解説】「ループリック」とは
大学教育再生加速プログラムについて

巻頭言 「学生の学修成果を高めるための教員の役割」

大学教育総合センター長 梅澤 修



横浜国立大学では、平成26年度「大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅡ：学修成果の可視化」の採択を受け、学生の主体的な学びの確立を目指した取り組みを進めています。去る2月開催のAP推進フォーラムは、私にとって、ちょうど大学教育総合センターの活動に身を置く時期と重なり、FD・SD活動について自身が学びを始める機会となりました。これまでも学士課程の質的転換の必要性とそのためアクションについて、様々な形で発信や試みがなされてきていますが、私のように今一つ理解ができないという教職員の方も依然として多いかと存じます。そこで、APの背景にある、大学における人材育成機能の強化について復習して

みたいと思います。すなわち、「想定外の事態に遭遇した時に、そこに存在する問題を発見し、解決するための道筋を見定める能力をもった学生が社会及び企業から求められている」や、「学生の主体的な学びのための学習時間の不足」という指摘です。そして、「学生の思考力や判断力を引き出し、課題の発見や具体化からその解決へと向かう力の基礎を身につけることを目指す能動的な授業を中心とした教育の保証」という学士課程の質的転換の必要性への言及です。（文部科学省中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」平成24年）これら

は、「大学における主体的な学び」の確立に向けて、学生の学修成果を高めることを教員に求めています。

そのためには、今まで「学生が自主的に学ぶ」であったものを「学生が主体的に学ぶ」に変えることが必要です。ただ、「主体的な学び」の意味するところには曖昧さがあり、まずは、学生から見て成績評価の不透明な部分をなくすこと、何を学んだら良いかを明確化することでしょうか。このような学生を成長させるための「学修成果の可視化」について、FD推進部門ではループリック導入による電子シラバスの改修を進めております。ぜひとも教員の皆様のご理解とご協力を頂き、教育内容・方法等の改善につなげて頂けるようお願い申し上げます。

学修成果を更に高めるための 質の高い授業をめざして

平成27年度「授業設計と成績評価ガイドライン」の策定について

大学教育総合センターFD推進部門長 上野 誠也
大学教育総合センター 曾根 健吾

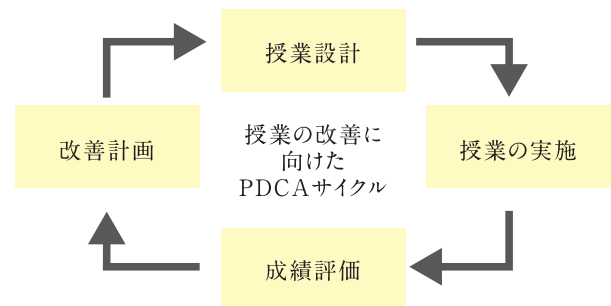
本年度、大学教育再生加速プログラム事業の一環として「授業設計と成績評価ガイドライン」(以下、ガイドライン)を策定しました。

策定に至った経緯として、平成24年に教務厚生部会において「優率」「不可率」の高い科目があること、教員の成績評価の基準にばらつきがあることが問題点として指摘されました。その指摘を受けて、教務厚生部会内に成績評価ガイドラインを検討するワーキンググループ(以下、WG)が発足しました。

WGでは、他大学におけるガイドラインの調査やWG内での議論を重ね、ガイドラインのたたき台を各部局の先生方に提示し意見を収集しました。集まった意見をもとにしてガイドラインを策定しています。平成27年度は6月から7月にかけて、大学教育総合センターFD推進部では各部局の教授会前にFDミニシンポジウムを開催し、ガイドラインの概要について先生方への周知を行ってきました。

ガイドラインにおいては、以下の3つの要点が挙げられます。

1 1点目は、授業改善に向けたPDCAサイクルの確立です。大学を取り巻く社会情勢が変化し、学生の学修成果が重視されている今、学生の学修成果を高め主体的な学びを確立するためにはPDCAサイクルを意識して学生に質の高い授業を行うことが重要であると考えられます。先生方には、授業改善のPDCAサイクルを念頭におき特に成績評価において履修目標、到達目標に基づく厳格な評価をお願いしています。



2 2点目は、授業における成績評価の基準を全学で統一することです。教員間の成績のグレードに対する認識を統一することは、学生が成績グレードのレベルを認識し自発的な学修を促す上でも重要だと考えられます。今回「成績評価の基準表」を導入し、成績グレードと履修目標、到達目標との関係を明確にし、学生の自発的な成長を促す基準表にしました。

「成績評価の基準表」

秀	優	良	可	不可
履修目標を越えたレベルを達成している	履修目標を達成している	履修目標と到達目標の間にあるレベルを達成している	到達目標を達成している	到達目標を達成できていない

3 3点目は、授業別ルーブリックの導入です。ルーブリックとは、学生が何を学習するのかを示す評価の基準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準をマトリクス形式で示す評価指標です。各授業担当の先生方に電子シラバス上で授業別ルーブリックを入力していただき学生に公開します。成績評価の基準を明確にし、学生に主体的な学修を促す効果が期待できます。ルーブリックの詳しい解説は本ニュースレターの4ページに掲載していますのでそちらも参照下さい。大学教育総合センターFD推進部では、平成28年度春学期分の電子シラバスの入力に向けて、現在「授業別

ルーブリック作成マニュアル」の公開に向けた準備を進めております。なお、成績評価の基準表および授業別ルーブリックの導入などにあわせて、平成28年度春学期入力分より電子シラバスを改修します。改修においては、授業外時間の学修内容を入力する項目の追加や、履修目標と到達目標の分離といった変更がありますので、電子シラバス入力の際に留意いただけますと幸いです。

最後に、本ガイドラインの策定、導入を通して国大生の学びの充実につなげ学生の学修成果を全学一丸となって高めていきたいと考えています。教員の皆さまのご理解のほどよろしくご祈願致します。

就業力の可視化①

「主体性とコミュニケーション能力がキーファクター」



大学教育総合センター 市村 光之

「就業力と大学教育」(AP/FDニュースレター創刊号)では、主体性とコミュニケーション能力が課題解決力などのジェネリック・スキルを發揮するキーファクターであることを説明しました。では、学生たちは実態としてどのくらいのジェネリック・スキルを持っているのでしょうか。大学教育総合センターでは平成25

年度より、就業力を測定するアセスメントとしてPROG(河合塾とリアセック社が共同開発)を希望者に実施し、就業力の可視化を試みています。このアセスメントでは、リテラシーとコンピテンシーの2側面から就業力を測定します。

知識を活用する 主体性が求められる

《リテラシー》は、知識を習得し、それらを活用して課題を解決するためのスキルになります。たとえば、情報を読み取り、分析し、結論を導く力であり、学び続ける力を含みます。過去3年の測定の結果、本学は7段階評価でレベル6点台を維持しています。リテラシーは大学入試の偏差値に比例する傾向がありますので、本学学生の学力に見合う結果です。

リテラシーは①情報収集力、②情報分析力、③課題発見力、④SPI(言語処理能力)、⑤SPI(非言語処理能力)の5項目で測定しています。本学学生は全項目とも全国平均を上回っていますが、①情報収集力が他項目に比べ低く、全国平均との差も少ない傾向にあります。与えられた情報を処理する能力は十分にあって、問題意識を持って自ら情報を取りに行く「主体性」に改善の余地があると予測できます。

集団活動からの学びが 就業力を向上させる

《コンピテンシー》は、経験から身に付ける行動性向であり、学業のみならず、サークル活動やアルバイトなど社会集団における他者との関わり合いを通じて培われる能力です。いかに学力があっても、状況を理解し、周囲とうまく関係を取り結び、働きかけられなければ課題は解決できません。1年生の測定結果を比べると、全国平均がレベル3点台の前半であるのに対し、本学学生の測定結果はレベル3点台の後半で、リテラシーほどの差はありません。社会人に求められる行動性向の完成度合いは、学力に係らず大学生のスタートラインでは全国的にほぼ同じということでしょう。

コンピテンシーは①対人基礎力、②対自己基礎力、③対課題基礎力の3つのカテゴリーで測定されます。ある私立大学で測定結果を共分散構造解析したところ、対人基礎力の強化により対自己基礎力が伸び、その結果、対課題基礎力の伸びに繋がることがわかりました(リアセック社提供「基礎力育成事

例」より)。対人基礎力またはコミュニケーション能力が、コンピテンシーを伸ばすカギなのです。本学の測定結果と全国平均とを比べると、親和力や協働力などの「対人基礎力」の差が少ない傾向にあります。視点を換えると、対人スキルを向上させれば、コンピテンシー全般の大幅な伸長が期待できそうです。

学業においてコンピテンシーを強化するには、講義による知識付与に加えて、グループ・ディスカッションやPBLなどのアクティブラーニング、さらにそれらの組み合わせを換える反転授業などが考えられます。大切なことは十分なリフレクションの機会を設けることです。たとえばグループワークの場合、①集団活動を体験させるだけでなく、②ワークを通じた他者との関係性を省察させ、③ディスカッションやレポートによりそれらの経験化・定着を促し、④次のワークの機会に改善点を実践させる。その仕掛けを作り、振り返りのサイクルを回すことで対人基礎力を強化できます。

【AP/FD用語解説】 「ルーブリック」とは

米国で開発された学修評価の基準の作成方法であり、学生が何を学修するのかを示す「評価規準」と、学生が学修到達しているレベルを示す具体的な「評価基準」を示すマトリクス形式で示す評価指標である。到達レベルを数段階に分け、各レベルにはそのレベルを満たした場合の「特徴」を記述する。この記述により達成水準が明確化されるので、他の手段では困難な、パフォーマンス(思考・判断、スキルなど)の定性的な評価に向くとされている。評価者と被評価者の双方に評価規準と評価基準をあらかじめ提示して評価の観

点を可視化することができると共に、被評価者への答案やレポートのフィードバックを促進する上で有効である。また、複数の評価者がいる場合、評価者ごとのズレの発生を抑制し、評価の標準化ができるというメリットもある。

(中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」(平成24年8月28日)の用語集および中教審大学教育部会(平成23年12月9日)での濱名 篤委員の説明資料を基に編集)

講義型授業におけるルーブリックの例

評価項目	評価基準				
	期待している以上である	十分に満足できる (履修目標)	やや努力を要する	努力を要する (到達目標)	相当の努力を要する
理解度 (35%)	授業内容を 超えた自主的な 学修による 理解が認められる	授業内容をほぼ 100%理解している。	到達目標は 理解しているが、 授業内容の理解に 不足がある。	到達目標に 達していることが 認められる。	到達目標に 達していない。
課題解決 能力 (35%)	解法が分からない 他人にアドバイスが できる。	何も参照せずに 独自の能力で課題を 解くことができる。	参考書などを 参考にすれば、 独自で課題を 解くことができる。	他人のアドバイスが あれば課題を 解くことができる。	他人のアドバイスが あっても自発的に 課題を解くことが できない。
調査能力 (予習) (30%)	自ら進んで予習範囲 を越えて調べている。	予習範囲を十分に 理解し、他人に 説明できる。	指示した 予習範囲の 理解にあいまいな 点がある。	指示された範囲は 予習するが、理解が 不十分である。	指示された 範囲は予習が 不十分である。

※評価項目の()は評価の割合を示しています。

※本例では、用語解説本文中の「評価規準」に相当する部分が「評価項目」と表記されています。

「大学教育再生加速プログラム」について

YNU学修成果の可視化

—学士力と就業力の可視化による学生の主体的な学びのデザインの構築—

横浜国立大学は、平成26年度に大学教育再生加速プログラム(テーマⅡ:学修成果の可視化)に採択されました。この事業においては、全学的教学マネジメントを強化し、学修成果の可視化によって教育内容・方法の改善を図り、学生が自らの学びを主体的にデザインできるようにすることを目的としています。

平成27年度も、平成26年度に引き続き大学教育総合センターが主体となってYNU学士力の可視化、YNU就業力の可視化をすすめています。その情報は随時発信していく予定です。なお、本事業の概要は大学教育再生加速プログラム特設ホームページ(<http://www.yap.ynu.ac.jp/>)で紹介しておりますので、ご覧いただければ幸いです。



横浜国立大学 AP/FDニュースレター第4号
(通号33号)

発行:平成27(2015)年9月

編集・制作:大学教育総合センターFD推進部・大学教育再生加速プログラム支援室

E-mail:yynu-ap@ynu.ac.jp

ホームページ:<http://www.yap.ynu.ac.jp/> (AP特設ページ)

<http://www.yec.ynu.ac.jp/> (大学教育総合センター)



大学教育再生加速プログラム